

台湾研修旅行

右城 猛

まえがき

第一コンサルタンツでは、以前は社員旅行を毎年の恒例行事としていた。平成 16 年のハワイ旅行を最後に途絶えている。今年、当社の創立 50 周年記念事業の一環として台湾に行くことにした。

今回の旅行の特徴は、「台湾を愛した日本人土木技師八田與一の生涯」の著者である古川勝三先生に同行していただき、台湾の歴史、八田與一と烏山頭ダムについて現地でお教えいただくことである。

八田與一のように人々から尊敬される立派な土木技術者が育つことを夢見て、社員と一緒に台湾に行くことにした。

旅行は、5月30日に出発する第1班と、6月6日に出発する第2班に分かれ、それぞれ3泊4日の日程で台南と台北を視察する計画である。

私は、愛媛大学の矢田部先生と一緒に国立高雄第1科技大学を表敬訪問する都合から第2班に加わった。

研修の概要

今年の3月20日、高松空港と台北桃園空港の定期便が運航を始めた。毎週木曜日に出発し日曜日に帰国する便と、日曜日に出発して木曜日に帰国する便の2種類である。第1班、第2班とも木曜日の19時50分に出発し、日曜日の19時30分に高松に帰る便を利用することにした。

1日目は台湾に行くだけ、2日目は烏山頭ダムと八田與一記念公園見学、3日目は自由研修、4日目は台北市内見学の予定である。

	西拉雅渡假飯店で昼食 台南駅 13 時 45 発 高速鉄道で左営駅 国立高雄第一科技大学訪問 左営駅 16:36 発 高速鉄道で台北駅 18:36 着 19:00 より 広東料理の店「儷宴會館」で夕食 台北国賓大飯店泊
6月8日 (土)	ホテル 9:00 発 貸切バスで九份着 10:20 九份 12:00 発、野柳 12:50 着 海鮮料理 野柳 15:00 発ホテル 15:50 着 18 時より 鼎極魚翅で夕食 台北国賓大飯店泊
6月9日 (日)	ホテル 8:00 発 龍山寺、故宮博物院、忠烈祠見物。 台北 101 に鼎泰豊 101 店で昼食 昇恒昌免税店でショッピング 桃園空港 15:15 発 CI178 便で高松空港 19:30 着 高知着 21:50



台湾全体地図

月日	行程
6月6日 (木)	高知 15:30 発 貸切バスで高松空港へ 高松空港 19:50 発 CI179 便で桃園空港 桃園空港 21:30 着 桃園国際空港ホテル泊
6月7日 (金)	桃園駅 8:21 発 高速鉄道で嘉義駅着 9:26 バスで烏山頭ダム、八田與一記念講演



台湾北部の地図

二日目(6月7日)

桃園から台南へ



桃園国際空港内にあるチャイナエアライン経営の桃園国際空港ホテルのロビー(写真:前田)



台北市内地図



桃園国際空港ホテルを7時50分に出発。



6月6日15時30分、総勢30名で高松空港に向けて会社を出発。



磁気の付いた側を上面にして矢印の向に自動改札機に入るとゲートが開く。日本では出るときカードが改札機に回収されるが台湾は出てくる。高速鉄道に乗る度にカードが貯まる。

台南から左営に行ったとき、ゲートが開かないので自動改札機が故障したかと思ったら、桃園ー嘉義間のカードを間違って挿し込んでいた。



桃園駅 8 時 21 分発の高速鉄道に乗る。台湾高速鉄道には、日本の新幹線「700 系のぞみ」をベースにした車両が用いられている。(写真:前田)

烏山頭ダムと八田與一記念公園



嘉義駅からバスで八田與一記念公園に向かう。現地までの約 50 分、古川先生から台湾の歴史、2.28 事件のことなどを説明していただき大変勉強になった。先生は「台湾の歴史」についても執筆されており、まもなく日本で出版される。



日本を出発する前の天気予報では、台湾は雨であったが、青空の広がる真夏日。気温は 35 度。

炎天下の中、八田與一が 8 年の歳月をかけて完成させた烏山頭ダムの堤頂を歩きながら古川先生の説明を聞く。



ダム完成後に八田與一の功績を顕彰するために地元民によって造られた銅像。與一はこの場所にいつも座って、工事の進捗状態を見ていた。そのときに、右手で頭髪をくるくる丸めるのが癖であった。銅像は、その様子を表している。

銅像の背後には、八田與一と妻・外代樹の遺骨を納めた墓がある。毎年、與一の命日の 5 月 8 日にはここで慰霊祭が執り行われている。



八田與一像を囲んで全員で記念撮影



少しは八田與一に近づけたらどうか(撮影:怜佳)



八田技師紀念室(記念館)には、技師の奥さま・外代樹さんの通信簿まで八田與一に関するあらゆる資料が陳列されている。古川勝三先生の著書もあった。時間がなくてほとんど見られなかったのが残念。



八田與一の銅像の側に、嘉南農田水利会が経営するホテル「西拉雅渡假飯店」がある。そのレストランで郷土料理の昼食をとる。

国立高雄第一科技大学訪問



高雄班の6名は、高速鉄道に乗る時間の都合上15分で食事を済ませ、タクシーで台南駅へ。そこから高速鉄道で左営駅に。左営駅には高雄第一科技大学から迎いの車が来てくれていた。

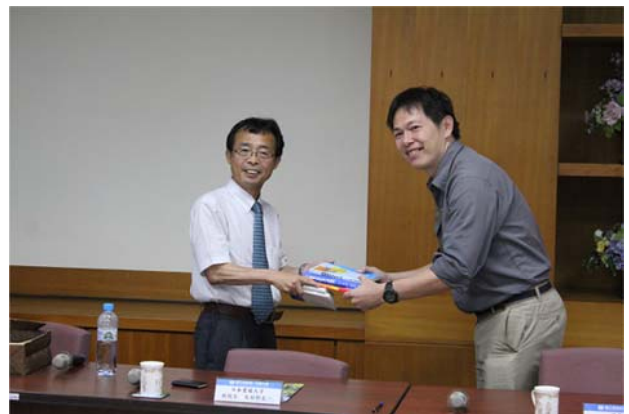


高雄第一科技大学には、愛媛大学から理事・副学長の矢田部先生、秘書の中島さん、国際連携推進機構国際教育支援センター長の陳先生の3名が来られており、我々の訪問はそれに合わせたものである。

我々が大学に到着すると、まず最初に許宏徳教授から挨拶があり科技大学の概要説明があった。



陳振遠学長からのお土産。高雄第一科技大学に関する資料やCDなどである。全員にプレゼントしていただいた。すべて台湾語で書かれているので解読が難しい。



高雄第一科技大学には、京都大学で工学博士の学位をとられた盧之偉(Chih-Wei Lu)副教授がおられる。先生は地盤工学を専門とされていると聞

いていたので、日本から持参した、「基本からわかる土質のトラブル回避術」「続・擁壁の設計法と計算例」「擁壁設計 Q&A105 問答」の著書をプレゼントさせていただく。先生は、私の著書を購読されていると話され、大変光栄であった。

盧先生からはお礼に台湾高山茶を頂いた。



教授の許宏徳先生には、高知名産の鯉節、ゆず塩、お菓子、そしてお座敷遊びに用いる「可杯(べくはい)」をプレゼントさせていただく。

これらの品は、恒石課長が気を利かせて準備してくれた品物。



可杯の遊び方を説明。



全員で最後記念撮影。



左営駅 16 時 36 分発の高速鉄道で 18 時 36 分台北駅に到着。

麗宴會館で広東料理の夕食



広東料理の店「麗宴會館」(リーエンカイカン)で矢田部先生らと共に夕食。



広東料理に乙女達も大満足。

3 日目(6 月 8 日)

檳榔(ピンロウ)

愛媛大学がチャーターした 40 人乗りの大型バスに 12 名が乗せていただき、九份に向けて 9 時にホテルを出発する。



九份へ向かう途中で檳榔(ピンロウ)と書かれた看板を掲げた店を見かけた。台湾には、この写真のような店がたくさんある。



上の写真のようにビニール袋に入れた果実を一袋 50 元(約 180 円)で売っている。ヤシの一種・檳榔樹(ピンロウジュ)の未熟な実石灰を塗り付け、コショウ科の植物・キンマの葉で包んだもの。噛みしめると口の中に青臭くて苦い独特の香気が広がり、口内に唾がたまっていく。噛むにしたがって唾液は赤く変化する。

噛めば眠気をさまし、空腹を抑える作用があるため、深夜営業のドライバーなどが愛用している。台湾集集地震があった 12 年前に来たときは、露出度の高い服装をした若い女性が檳榔を販売している光景が至る所で見られたが、風紀上の問題から 2002 年に規制法が制定され、最近では道端に立つ檳榔売りの女性を見られなくなっている。

現在、檳榔を噛んだ唾液を道路に吐き捨てると罰金刑が課せられる。中心街では見られないが、郊外では赤い血のような唾を吐き捨てた跡や、噛み尽くしたカスが見られる。

檳榔を服用していると咀嚼障害および口腔ガンを引き起こす恐れがあるといわれている。

上の写真の檳榔は、九份で購入したもの。久しぶりに檳榔の味を思い出した。

九份(きゅうふん)



台北から九份までは約 1 時間であるが、土、日曜日は混雑するため車を乗り入れることができない。途中の駐車場で、連絡バスに乗り換えなければならない。乗車賃は往復 30 元。

10 時 40 分、基山街への入り口に到着する。



基山街には両側に小さな土産店がビッシリと並んでいる。

ここの店舗の開店は 10 時。開店してまだ 40 分しか経っていないので比較的空いていたが、帰り際には、身動きが取りにくいほど混雑していた。



レトロな街並みが残っている豎崎路(シューチール)



テラスに座ると瑞濱湾や潮境公園などの美しい海を眺めることができる。



宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」という映画のモデルと言われる街。

ここは、2・28 事件を扱った映画「悲情城市」のロケ地としても有名である。



「阿妹茶酒館」のテラスで記念撮影。



映画「悲情城市」のロケ地に使われた「阿妹茶酒館」でお茶を飲む。ここは観光の目玉となっている。

土曜日なので店は混雑しているのではと心配であったが、幸運にも8人が余裕で座ることができた。まだ時間が早かったからであろう。



色鮮やかな九份の寺院。



九份から野柳に行く途中で見掛けた墓地。こちらには沖縄で見掛けるような立派な墓地がある。

野柳地質公園



野柳に向かう途中の海岸線は、室戸岬で見られるような砂岩と泥岩の規則的な互層・タービダイト層のような地層が見られた。



この地方にはリゾートホテルがあり、スカイスportsやマリンスportsが盛んなようである。数基のパラグライダーが空を飛んでいた。



野柳地質公園に着くと、何十台もの観光バスが並び、観光客で溢れていた。

土産店や海鮮料理のレストランが並んでいる。バスのドライバーお薦めの「美観園」で海鮮料理の昼食をとる。



エビ、イカ、イセギなどの料理が次々と運ばれてきた。安くて美味しい。



「安い」「早い」「美味しい」大満足であった。



岩盤が海水と潮風に浸食されキノコのような形状になっている野柳地質公園。「巡查」と書かれたシャツを着た巡視員が多数見張っている。少しでも奇岩に触ったり、上に登ったりすると注意される。

奇岩にはそれぞれ名称が付けられているようであるが、見る角度が少しでも異なると名前のようなイメージはできない。



「芸者」と名前がつけられている奇岩の前で記念撮影。



野柳地質公園の最大の人気スポットは、このクイーンズヘッド。歩道には、立つ位置を示した足の印がある。この位置に立って、この角度で写真を撮るのがベスト。そのためには、灼熱の太陽が照る中で 20 分ほど並んで順番を待たなければならない。



依岡調査役は、若い美人の女性によくもてる。



奇岩ができる様子を示したポスター。



風化が進み首が折れた奇岩。



地質公園の出口には、日本の観光地と同様に土産店が通路の両側に軒を並べている。台湾貝と呼んでいたが、真珠のようなネックレスを売る店も多い。ネックレスとブレスレットをセットで 150 元(約 500 円)まで値切って購入した。留守番をしている家内への土産として。



足下の岩には所々に化石が見られる。

フカヒレの店「鼎極魚翅」で夕食



野柳から帰ってホテルで2時間ほど休憩した後、宿泊したホテル「台北国賓大飯店」の近くにあるフカヒレの店「鼎極魚翅 (ディンジーユーツー)」に行く。矢田部先生ご推薦の店。

「ふかひれ姿煮コース」(2680 元)を注文する。メニューは、「和風サラダ」「ふかひれ姿煮スープ」「チリ産アワビ」と「チーズ伊勢エビ」(ステーキか骨付き羊を選択してもよい)、「チャーハン」「デザート」の果物」である。日本では信じられないほど安い。



チリ産の干シアワビ



チーズ伊勢エビ



陳先生お勧めのアルコール 58 度の金門高粱(コーリャン)酒。



料理に満足して記念撮影



これが「ふかひれ姿煮スープ」



ホテルに帰る途中、印鑑店「兄弟治印」で私の運勢が今以上に良くなるように印鑑を注文する。



注文した後、店の主人と一緒に記念撮影

4日目(6月9日)

市内観光



台湾人のサラリーマンの平均年収は 150 万円。コンビニ・バイトの時給は 300 円と安い。このため、マイカーは少なくバイクが多い。それにしても、東日本大震災の義捐金として台湾から送られた 200 億円は大きい。台湾の人口は約 2,300 万人なので、国民一人当たり約 1000 円に当たる。



7時にホテルをバスで出発。途中、朝食レストランを発見。台北の人々の多くは、朝ごはんも外食主義。このような店で朝食をすませる。「安い」「早い」「美味しい」と3拍子揃っている。



台北で最も古い歴史のある寺「龍山寺」。本尊は観世音菩薩であるが、道教や儒教など様々な宗教と習合し、いろいろな御利益を授ける 100 以上の神様が祀られている。



怜佳さんとツーショット



「財運招来」「悪霊退散」「勝負必勝」を叶えてくれる商人の神様「関聖帝君」（三国志で有名な武将・関羽）に、第一コンサルタンツの商売繁盛、社業発展を祈願する。



「龍山寺」を出て、次は故宮博物院にバスで向かう。(写真:前田)



2 番目の見学先は、故宮博物院。元々の名称は、孫中山(孫文)を記念して造られた「中山博物院」。

8 時 30 分の開館を待って入館。翠玉の白菜、豚の角煮、象牙多層球、象牙透かし彫りなどメインスポットのみを見物する。



「忠烈祠」に到着すると、11 時を少し回っており、既に衛兵が隊列を組んで行進を始めていた。隊列の周りには、カメラを持った中国人観光客が取り巻いていた。(撮影:前田)



「忠烈祠」の正門前で、二人の那須君と記念撮影。



台北忠烈祠は 3 度目の見物であったが、観光客のマナーが昨年とは様変わりしていた。大勢の中国人観光客が隊列を組んで行進する衛兵の前方に立って写真を撮ったり、交代儀式の見所となる宮殿前では立ち入り禁止のバリケードテープが張られているにも関わらず、係員の注意を無視して中に入って写真を撮るなど無礼千万な行動が目立った。故宮博物院でも係員の注意を無視して展示物の写真を撮りまくっていたようである。

今年の 4 月に、李登輝元総統の秘書をされている小栗山さんが高知に來られた時に、中国人観光客のマナーが悪いという話を伺っていたが、ここまでひどいとは想像もできなかった。



台北 101 の入り口



空にそびえる地上 101 階建ての台北 101。高さは 509.2m。スカイツリーの 634m よりは低い。



店では小籠包や餃子を作っている厨房をガラス越しに見ることができる。



小籠包が世界一美味しい「鼎泰豊（ディンタイフォン）台北 101 店」



台湾最後の朝食は、点心料理。この店の目玉は小籠包。海老シューマイも美味しい。

ニューヨークタイムズで「世界の人気レストラン 10 店」に選ばれただけある。



店の入り口にある鼎泰豊のマスコットキャラクター「籠仔（ロンザイ）」。顔は小籠包の形。



昼食の後、台北市内唯一の政府公認免税店「エバーリッチ昇恒昌」に入る。入り口に線香とお供え物が置かれており、店員が線香に火を付けて拝んでいた。若い店員に尋ねたところ、「神様は空

にいる」「商売繁盛」を祈願しているという説明であった。

あとがき

台南には水田が広がり、青々とした稲が育っていた。二期作目の蓬莱米である。台湾統治時代に台北帝国大学の磯永吉博士と台中農事試験場の末永仁らの数十年にわたる品種改良で完成したものである。食事の時に欠かすことなく飲んだあの美味しい台湾ビールにも蓬莱米が使われている。

蓬莱米が育つのは、日本人土木技師・八田與一が造った満水面積 1000 ヘクタール、有効貯水量 1 億 5,000 万立方メートルの烏山頭ダムと、16,000km にわたって張り巡らされた嘉南大圳（かなんたいしゅう）が嘉南平野を潤しているためである。香川県の面積に匹敵する広大な嘉南平野を不毛地帯から大穀倉地帯に変えたのである。

台湾の外周を走っている鉄道も日本人土木技師が台湾統治時代に建設した。台湾の一寒村に過ぎなかった「九份」が発展したのは、藤田組が金の採掘を行っていた台湾統治時代である。そのときの面影を九份の街並みは色濃くとどめていた。

日本では、終戦を境にして古来の良き伝統や文化、精神が完全に断ち切られた。我々は日本の本当の良さを教えられることなく育った。

台湾に来ると日本人の戦前の足跡が残っている。台湾統治時代、日本から多くの教師や技術者が大志を抱いて台湾に渡り、使命感に燃え、身命を賭して台湾の発展に尽くした。我々はこれらの先輩の偉業を学び、思想や行動を規範にしなければならない。

戦前の日本教育を受けた台湾人たちは日本精神を受け継ぎ、戦後における台湾の民主化や経済発展の原動力にしてきている。台湾の民主化を成し遂げた李登輝元総統、世界的企業である奇美グループの創業者・許文龍氏たちである。いずれも大の親日家である。戦後まで 50 年間続いた台湾統治時代、明治政府は、台湾を植民地というよりも内地の延長と見て、欧米から取り入れた最先端の技術と莫大な予算と優秀な人材を投入し、教育、上下水道の建設、港や鉄道の整備、田畑の灌漑に力を注いできた。

今回、古川勝三先生を通じて許文龍氏にお願いし、彼の著書「台湾の歴史」をわが社の社員全員にプレゼントしていただいた。その中に、『戦後まで 50 年間続いた台湾統治時代、日本ほど良心的な植民地政策を取った国はなかった。日本はインフラ整備に膨大な金と人材を注ぎ込んだ。それも、投入した資金が直ぐには回収できない医療や教育に力を入れた。これがなければ、今日の台湾の発展はなかった。戦前の日本人には使命感に燃え、遵法精神が強い立派な人が多かった。先生は皆日本から来ていたが、戦後に教え子から台湾に招かれていない先生はほとんどいない。何回も来ている。当時の先生が如何に台湾の子供たちのために一生懸命教育してくれたかを証明している』と書かれている。

台湾人は、「日本精神」という言葉を良く使う。台湾語で「リップンチェンシン」と言い、「清潔」「公正」「勤勉」「責任感」「正直」「規律遵守」などの意味が含まれている。故宮博物館や忠烈祠で中国人観光客を見るにつけ、日本人の礼儀正しさを確認できた。

国土を豊かにし、安全性を高め、発展させていく上でインフラ整備の重要性が如何に重要であるかを改めて気づかされた研修旅行であった。

古川勝三先生には大変ご多忙であるにも関わらず、第 1 班と第 2 班に同行していただき、貴重なお話をたくさんしていただいた。先生には、台湾で研修する切っ掛けを作っていただくと共に、尊敬される土木技術者になるには何が必要かを気づかせていただいた。近畿日本ツーリストの出宮泰典高知支店長、矢野十和子ツアーディレクターにはいろいろとお気遣いいただいた。研修旅行に参加された社員には集合時間を励行し、品位と思いやりのある言動や行動をとっていただいた。皆様に心より御礼申し上げます。

最後に、高雄第一科技大学訪問という大変貴重な機会を与えていただくと共に、今まで口にしたことがない美味しい料理を食べる機会を与えていただいた愛媛大学理事・副学長の矢田部先生、陳先生、中島さんに心より感謝申し上げます。

執筆に当たり、前田秀夫技師長、右城怜佳さんの写真を使わせていただいた。

【2013 年 6 月 11 日記】